

大沼法龍著

六方禮經代誦話

敬行寺發行

# はしがき

南無阿彌陀仏、なむあみだぶつ。『六方礼経』の原稿は去年書き終わっていましたが、第二十五集『心の転換』、第二十六集『廣大難思の大慶喜』の出版を急ぎましたので先に出版し、『六方礼経』の清書を昭和五十年一月二十八日に終わって、いま「はしがき」を書いていきます。

ちようどセミヤトンボが飛ぶ力を失って、羽根をビリビリ動かしているように、八十の老境に入ったので、心はやたけにはやれども、耄碌というのか気力、迫力、馬力が出ません。もうえゝわいと投げ槍のような気になり、発動機たる心の本源が空舞い、空転をしているような気がします。上人が「耳目手足やすからず」といわれてありますが、十年前から左眼は青ソコヒで失明、右眼は白ソコヒでようやく原稿が書ける、両足は歩行には支障はないが、膝から下は痺れています。でも、この仏書が完成する

まではと頑張っています。しかし、今日まで書かしていただいて、少しでも世の中の方がたのお役に立つと思えば、感謝せずにいられません。

◎ ◎

みなさん自業苦、業苦楽はこの世にありますよ、死んで、その結果が顕われたところが地獄、極楽になるのですよ。死んだら地獄に落ちると恐れなさんな、現在の延長が未来ですから、いま自分の行為を改めて善根を励みなさい。この『六方礼経』の講話を読んで、この世が業苦楽にならなければ、あなたは救われませんよ。自分の心を改めなければ、嫌でも自分の業に引かれて自業苦に行かねばなりません。

福井のある 姑さんが、嫁さんを嫌っていた。これが自業苦の始まりですよ。嫁は前生のあなたの娘ですよ、親孝行が足りなかったから、母親の元に帰って来て立派な相続人を産んでくれ、あなたの老後を見届け、死後は法事用いをしてくれるのに、嫁を悪んで敵視するから嫌われるのですよ。頑丈な福井の 姑さんが、嫁の世話にはな

らんと頑張がんばって虐いじめていましたが、食中風くいちゆうふうになった。いくら食たべても食たべたような気がしないので垂たれ流ながし、見舞みまいにきた人ひとたちに誰だれにでも「嫁よめが何なんにも食たべささん」と廻まわらん舌したで訴うたえる。嫁よめの身みになつたら堪たまらんから「面会謝絶めんかいしやくぜつ」と張紙はりがみをした。こうなると、誰だれも見舞みまいに来きてくれないと泣ないているのが自業苦じごくではありませんか。人間にんげんは病やまいの器うつわですから、どんな病氣びようきが出るかわかりませんよ。病やまいによい病やまいはない、膿病にせやまいで寝ねているのは論外ろんがい、字じを見てごらんさない。病やまいには甲乙こうおつなし、どの病やまいでも平やまいだれへいに丙へいと書いてあるでしょう。四百四病ひやくしよびようといひながら、人間にんげんが悪性あくしやうになればなるほど奇病きびようが流行りゆうこうしてきますよ。身体からだの病氣びようきにも増まして、心こころには八万四千ばんせんの煩惱ぼんのうがあり、八億四千おおくせんの思おもいがある。その煩惱ぼんのうの毒素どくそが身体中からだぢゆうをかけ廻めぐり、あなたを苦しめていのですから、身体からだの病氣びようきより先まきに心こころの病氣びようきを養生ようじやうしなければなりません。それを放置なげやりにしておいて、慾よくや怒いかりの毒素どくそを撒まき散ちらすから、家庭かていも社会しゃかいも連続れんぞくして爆発ばくはつしているのです。その元もと栓せんを締しめるのを忘わすれているから、思おもわぬ珍事ちんじがおこるのです。

福井の大地震、嫁さんは姑さんを捨てて飛び出すとき、玄関のところで押し潰されて死んだ。姑さんの方は、家は潰れたけれども、箆筒が邪魔して眼を白黒させて生きていた。お経にはよく説いてありますね。「求生不得、求死不得、罪惡所招、示衆見之」(死を求めても死なれない、生を求めても生きられない、罪惡の招く所、自分の持っている業だから仕方がない、衆に示して之を見せしむ)。一般に公開して、こんな悲劇があるが、あなたはどうか見ているかい、よい種を蒔いていると思えますか。四国一の鰻屋に泥棒が入ったので、今度はお城のような堅牢な建築をして、大祝いをし、四十人ぐらい招待客が泊まっていたが火事、プスリプスリ煙は出ても手の施しようがない。ようやく一角を崩し、死体を並べたが、男女の別もわからない。通る人が「鰻の蒲焼きのようだ」と。大釜でタコを一時に百匹でも入れて茹でる家の主人が、足を這らして釜に落ち、茹でダコのようになって死にましたよ。肉体精神、心身ともにいま苦しんでいるのが、いま自業苦ですよ。人間世界の苦しみと地獄の苦し

みとは比較にならない、百千万倍の苦しみと言ってるけれども、死んだ先の百千万倍の苦しみより、いま齒が疼く方が苦しいではありませんか。心身ともに悦子の人があ  
るのに、苦しまねばならないとは何が原因か、どこに苦しまねばならない原因がある  
か、それを教え、その苦しみから解放していただくのが『六方礼経』ですよ。

◎

◎

私が広島県の三原に布教に行ったとき、上品な天神さんのような人品のよい老人が  
挨拶にこられた。「お名前は……。」「私は浦島と申します。」「浦島太郎さんか。  
あなたは信仰が厚いでしょうね、福德円満な相ですよ、おいくつですか。」「七十九  
歳になります。」「これは驚いた、六十ぐらいにしか見えませんよ。」「私はいつも  
幸福を感謝して、お念仏を称えさしていただいています。私が二十前後のとき、後生  
が気にかかり、苦になり、五里三里のところには昼でも夜でも自転車でも参っていました  
た。すると父の兄、伯父が来て、「お前の息子に意見をせんかい。」「何か悪いこと

でもしたかい。「悪いことではないけれども、どこの説教にも息子が参る。遅れてきたときでも、一番前に出て聞くが、お寺には年寄りが参るもの。それに、若いものが一番前に出て聞くのは生意気なようでいけない、一生懸命で仕事をせえと、言うて聞かしたらどうだ。」「そうかい、息子は仕事をようするぞ。俺が脚が悪くて遠方に参詣できないから、息子が参ってくれるのだ。」そして、早速「おい、ちよつと来い」と向こう座敷で仕事をしている私を父が呼んで、「伯父さんが来て、お前があまりよくお寺に参詣するから、仕事をするように注意しにこられたが、俺は嬉しいぞ。この世の眼糞ぐらゐの財産は摺り潰してもよいから、後生の一大事を取り失わないようにしてくれ」と、叱るかと思つたら讃められたので、まあ熱心に求道さしていただきました。が、この世の利益きわもなしとは嘘ではありません。子供に恵まれていますが、親に心配をかける子供は一人もおらず、みな順調に独立し、どの孫もこの孫も入学、結婚、就職、目出度いことばかり報告にきますが、仏法の徳はどこまで広

大だいななか、たただだおお念ねん仏ぶつするするよりより道みちががありありませません。』とといわわれたたが、このこの世よのの業ごく苦く楽らくではではありありませませんか。

皆みなさん、どどちちららがが好すききですすか。原げん因いんががななけけれればば結けつ果かはは出でませませんよ。

仏ぶつ教きょうはは抜ばつ苦く与よ楽らく、苦くをを抜ぬいいてて楽らくをを与あたててくくだだささるるので、死しぬぬるる用よう意いではではありありませませんよ。人じん世せいはは苦くしいしいここととははありありませませんか。四し苦く八はつ苦くといいつつて、見みるるもものの聞きくくももののすすべべててがが癩しかのの種たねですすが、そそれれはは集あつめめたた原げん因いんががありあり、自じ分ぶんがが身しん口く意いのの三さん業ごうでで作つくつつたた原げん因いんががあるあるからからですすよ。滅めつ度どのの証さとりを得とるるののににはは八はつ正しょう道どうとと言いつつて、正ただしいしい道みちをを実じつ行こうししななけけれればば楽らくなな生せい活かつははででききませませんよと、日にち々にちのの生せい活かつにに正ただしいしい実じつ行こうををせせよよとと教おしええててああるるのでのです。

肉にく体たいはは五ご十じゅう年ねんかか八はち十じゅう年ねんかかでで滅ほろびびるるけけれれどども、精せい神しんはは三さん世ぜをを貫つらぬいていて永えい遠えんにに生いきるるものものですすから、このこの世よでで心しん眼がんをを開ひらけば、このこの人じん世せいがが変かわわつつててここななくくててははななりりませません。

◎

◎



浄土門じょうどもんといえは往生おうじやう浄土じょうどの教えおしということですが、往生おうじやうの二字じじについて説明せつめいすれば、往生おうじやう生うまると読よめば、死しんでからになりますから今の浄土宗じょうどしゅうになり、身命終しんみょうじゆ、体失たいしつ往生おうじやうになります。生いかされ往ゆくと読よめば、平生業成へいぜいごうじやう、いま攝取不捨せつしゆふしやされてお浄土じょうどに帰かえらしていただく浄土真宗じょうどしんしゅうの心命終しんみょうじゆ、不体失往生ふたいしつおうじやうになるのです。

◎

◎

浄土宗じょうどしゅうの体失往生たいしつおうじやうより一歩前進いっぽぜんしんして、浄土真宗じょうどしんしゅうは心眼しんがんを開ひらかしていただく、不体失ふたいしつ往生おうじやうが聖人せいじんの唯信独達ゆいしんどくたつの大法門だほうもんであるのに、まだ肉体にくたいの往生おうじやうに固執こしつしているとは情なさけないことです。

◎

◎

山やまも山道やまみちも昔むかしに変わかわらねど

変わかわり果はてたる我心わがこころ哉かな

殺ころそうと狙ねらうていた弁円べんえんが聖人しょうじんの温顔おんがんに接せつし、お怪我けががなければよいがとお待ち受まちう

けするとは、天地の異いではありませんか。これが宗教の徳、仏智が満入すれば至徳具足の益、外に顕われては転悪成善の益、宗教を聞けば人世の考え方が全然変わってくるのです。変わらなないのは、信仰が徹底してないからです。効能が顕われなような宗教なら聞く必要がありません。顕われなないのは、救われてない証拠です。



信仰がなければ、

世の中は一つ契えば又二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や（故人）

七やみもだえて八つあたり

九るしみぬいて十死んだ（私）

熱心に求道して開発すれば、

世の中は一つ契えば又二つ

三つ四つ五つむげの一道（私）

なむあみだ、やみもくのうも皆晴れて

とわの証りに入るぞ嬉しき（私）

遊んでいて得られるものは、恥と貧ということがありますが、何でも努力しなければ立派な結果は得られません。求道しなさいと言えば自力のように思われるが、心が満足するまで聞いて実行しなさいということです。努力に応じた結果が得られるのです。



人間は自惚れがやまない、自力の執着が離れない、「邪見憍慢の悪衆生は信楽を受持すること甚だもって難し、難中の難これに過ぎたるはなし」と書いてあるけれども、自分が邪見憍慢の悪衆生であることに気がつかず、反省をし切らないから、信楽

開発まで到達し切らないのです。

五、六人集まっているとき、「自分が悪いと気のつく人はいないなあ。」「しかし一人だけいるよ。」「誰か。」「桶屋だよ。水が漏れると、自分の腕が悪いといわずに、輪が悪いと言っているのではないか。」「なるほど、そうだなあ」と感心していると、通りかかった桶屋が「わがええわがええ」と呼んでいたので、「やっぱり我ええと言ってるよ」と大笑い。

◎

◎

人間は肉体を可愛がるのが激しい。物質には現を抜かして真剣になるけれども、永遠に生きる精神の修養の方には無頓着であります。悪には加担し易いけれども、正義を貫くということは難しいのであります。三毒の煩惱より他に知らぬ悪性の心が、合掌し求道し、体験させて頂くことは稀有のことであります。また善根を励むということも、容易な業ではありません。施し一つでも弘法大師が「名利のために千金を投

げ出すは壽を撫でるよりも易く、慈悲のために一錢を投げ出すは生爪を抜くより難しいとおっしゃってありますが、飲み食いや結婚などには贅沢をするけれども、慈悲善根のためには知らぬ顔している人が多いのです。

私がせっかく信仰の真髓を書いて末代の同行の指針にしようと思いましたが、出版する費用がなかったらどうすることもできない、宝の持ち腐りですけれども、それを聞き伝えて応援さしていただきたいとお芳志をいただいたのを第二十六集の『廣大難思の大慶喜』三二二頁に発表しましたら、こんど出版のときには応援さしてくださいとお芳志を賜わったのが次の通りであります。

一金貳拾万円

福井県坂井町大味

田島真誠

一金拾万円

福井県越前町玉川

橋詰清

一金拾万円

福井市文京町四

山口さだ

一金七万円

赤穂市下飯屋

浜尾正義